

3. 小出治（都市防災・防犯計画）／東京大学教授（2002年4月27日）

伊藤 まず、他の都市などにあまり専門でない先生方もかなりいらっしゃいますので、大枠の質問からさせていただきますたいのですが、今の日本というのは、安全な国とお考えかどうか。

小出 犯罪に関して言うと、終戦後の中では、犯罪の量と質が相対的に言えば悪くなってきている時期だと思うのです。量的には増えてきている。質的には、外国人との関係。それから犯罪をするものとして「青少年」が増えてきている。それが今の社会不安みたいなものに反映している。意識的には、危ないという感じになってきているのではないのでしょうか。もう一方は、警察力そのものが相対的に低下している。だから、逮捕の検挙率が4分の1ぐらいまで落ちてしまっている。今まで90%とか80%とか言われていたものが、結局下がってきたものですから、ここ数年は一般の人は危ないと思っているのではないのでしょうか。

伊藤 犯罪だけにかかわらず、一般的な社会の安全性についてはどうですか。災害の面についてとか。

小出 基本的には、日本の経済が悪いところであって、そのため社会的に非常に不安定なものになっている。そういうことから、あまり健康的ではないような感じがしますね。自然災害なんかも元々ポテンシャルがあって、ある程度予見できているから、それに対して意識がそんなには変わっていないような気がしますけどね。ただ、新しい東海地震だとか、南海道だとかのそういう新しい話題が出てくると、地元の方は心配になっているかもしれないですけどね。今、非常に社会的な不安があるとすれば、それは、戦後の中ではひとつのピークになっているのではないのでしょうかね。この中に都市型犯罪というか、既成概念みたいな物が全部壊れ始めている。それから、特にセクハラとかストーカーみたいなもの、犯罪とモラルみたいな境界線みたいなところに問題が出てきていると思うのです。たとえば、家庭内暴力とか、そういうのがそばに出てきてしまっていて、そういうのが政治家から始まって、教師であったり、警察官であったりそういうのも全部外に出てきてしまう。そうすると、今までそういうのではないと思っていたが実際はあったという。実際はアンダーグラウンドなものがあったのに、今は全部外に出てくるようになってきている。そういう意味での違いが出てきている気がしますね。

伊藤 先生のご専門の犯罪に対して言いますと、例えば、殺人の件数とか、青少年の犯罪という括りりで比較すると、特に最近特別多いかということ、実は同じくらいなんですよ。ただ、中身を比較すると、例えば、戦後の殺人なんかは・・・。

小出 凶悪犯そのものは、変わっていないのだけでも。てっとりばやいのでもいいですよ、万引きとか、特に関西では多いわけですよ。量が増えてるって事で社会不安を感じるよりも、例えば青少年が、子供達が、引ったくりをするでしょ、今まではやるほうもプロ、受ける方もある程度のお金持ちの水商売のお姉さんとか狙われる、ということがあった中で、子供達が出てくることによって、何万円という単位から、何千円単位になってくると、そこらのおばちゃんのかごとかそこらの鞆を狙えば良くなったわけですよ。両方の普遍化と普及というか大衆化があって、身近な犯罪になってしまった。統計的な量が増えたというよりも、むしろ被害者の人が、一般的な人が増えたということではないのでしょうか。そういうことが、特に大阪の方では多くなったと言えるのではないのでしょうかね。

伊藤 殺人なんかと同じこと言えますよね。もう、狙われるべくして狙われた怨恨とか、そういうことじゃなくて。普通は殺されない人まで殺されてしまう。

小出 そういうところでの、犯罪の大衆化っていうところで、自分達が事後的に犯罪に遭遇することが増えてきた。今まで犯罪が、無縁のものだと思っていたのが、前に出てきて、青少年化するとか、アマチュア化するとかで、非常に身近なものになってきている。

伊藤 そういう風になってしまったというのは、今おっしゃった、社会不安とか、教育の問題もあると思うんですけど。

小出 ここ10年の問題だけどもね。だから教育の問題だと思うんですけどね。ですから、犯罪者の半分は子供達だよ。それと一方には、犯罪のプロ化、組織的な犯罪、と2局化してきている。青少年の問題に関して言えば、非行みたいなものから始まるので、やっぱり家庭の中での問題でもあるのではないのでしょうかね。

吉川 教育の問題というのは、教育がなんか変わったということですか。

小出 その辺は良く分からないんですけど。

吉川 それとも過去のものが今になって。

小出 普通に言われている問題としては、家庭教育とか学校教育なんかは父権とかがなくなってきて、一方では、受験のテクニックみたいなことだけ教えて、社会のモラルとか、社会教育みたいなものがなくなってきた。だから、母権社会だから、家の中で父親が怒ることがなくなったとか、ほんとかどうかは良く分からないですけどね。

吉川 あと最初の方で出てきた、警察力の低下って言うのは、犯罪の変化による低下なのか、警察そのものの問題なのか。

小出 構造的にいいますと、ひとつは公務員の定員っていうのがあって、数が増えないということ。だから、都市の犯罪が急激に増えるようなところに対して、人員を配置できないということがあるわけですね。やっぱり、現場にいる人の質というか、そういうのも下がってきている。警察から言わせれば、地域とのコミュニケーションがないということで、情報が入らないとか、広域化であるとかいわれていますけど、一番大きな事での公務員の削減みたいなことと、その中での質の低下みたいなことがあるんじゃないのかなと思うんですよ。これは避けられない。これは、中央の公務員と地方っていうのは、一般的には同じだと思うんですよね。非常に対応が悪いし、激務だし……。一般に会社をリストラされて、公務員になるとか、警察官になるとかは、どうしてだと思いますか。今までは、社会のための使命感、お国のために働くとか、やっぱり親父が警察官で立派だったからとか、お金ではないところでの使命感だとかでやってきたものが、完全に崩れてしまっている。もっと、仕事はきついし、金は少ない、使命感はないときたら、もうやることはない、という構造になってきていると思うんですよ。ほかの地方公務員なんかだと、時間が楽だとか、5時には帰れるとか、なんか事件が起これなければ3日に1回は休みだとか、非常に楽でもお金はくれるとか、楽な生活ができると思って入って、いざというときには、なんの役にも立たない。そういう構造になっている気がしますね。だから、これからは、もっと検挙率は下がっていく。だからこれからは、FBI みたいな特殊のチームにして、凶悪犯罪みたいなものに対して特殊なプロジェクトをつかって、そっちに重点配置していく。要はオールマイティに全部を抑えるのではなくて、重点的に抑えるような仕組みにしていかなないと、とても間に合わないんじゃないかと思うんです。で、浮いたところというのは、軽い犯罪は、市民で抑えていかなないといけないんですよね。それで、市民運動とか、防犯運動とかをやったかなければいけないと思うんですよ。青少年犯罪であるとか、ストーカー犯罪なんか、あるいは浮浪者であるとかは、自分に起こるかもしれないけれど、社会的な不安として残っているのは、やはり法的な犯罪と、社会的な犯罪の境目みたいな所で、社会的な問題があると思うんですね。そこで、警察を導入して、セクハラであるとかストーカーであるとかいうところに警察をいれて、家庭の中に入れていくというのも、本来の警察の仕事ではない気がしますね。もう少し重点的にシフトして、やる場所はやってもらって、残りの空いた部分は、自警組織であるとかあるいはNPOであるとか、そういうのによって補完していく仕組みを作っていかなないと、両方だめになるのではないだろうか。

伊藤 アメリカなんかでは、FBI なんかがある一方でニューヨークでは、ジュリアー二前市長は、警察を増やして地下道を巡回させて、ドラッグをやったような人に声をかけさせたりとか、そういう下のレベルまで下りて行ってやったことによって犯罪が激減しました。そういうのが日本で言うNPOなのか、ガーディアンエンジェルスなのかどうなるのかは分かりませんが。

小出 ただ、アメリカの場合は、下のほうの質が相当悪くなってしまっていたのではないのでしょうかね。で、一部のFBIのような機関にしか経済力がなかった。そのために下のほうにはっぱをかけて、社会的な使命感を与える。そうすることによって、このような効果が出た。日本はまだそこまではいっていない。もう少ししたらそういう風になるかもしれないですけどね。

伊藤 石原都知事なんかは、警察を増やせと言っていますね。特に東京なんかは、増やすという選択肢はないのでしょうか。

小出 良く分析していないけれども、警察官の数が減ったので犯罪が増えたというような数のギャップで今の犯罪が増えている感じはしませんね。ミクロ的にはね。マクロ的には、そういう問題が起こってくるかもしれないけど。問題はむしろ新しいところに人員をすぐに対応できる、即応できるようなシステムにしていく。公務員の配置は犯罪率も入っているんだけど、大体、ミニマムスタンダードみたいな基準で決まっている。そうすると、犯罪の多いところ、少ないところとかで、そんなに警察官の配置が変わるわけではない。しかも、犯罪が急激に増えてしまうところに対して、即応的にシフト、対応することができ

ないわけじゃないですか。それは、警察も消防も同じではないですか。消防も過去の火災の件数、出火率みたいなものも考えている。人工的なものに対してのユニットのようなもので、対処する。火災の場合は、そんなに急激に変わるわけではないからいいが、警察の場合は刻々変わってきていて、それで今は八王子であるとか東京の場合はそういうところが急激に悪い。総枠を増やすのではなく、むしろそういうところをシフトできるようにする方がいい。

伊藤 今お話いただいたようなこと、そういう提言を、先生を含めていろいろな人がしていかなければならないと思うんですけど、もし、そういう風なことが遅れた場合に、いまの状況が3年後5年後、これから放置していくともっと危険な国になっていくというか、どんなふうになっていきますか。それとも自浄作用ということで、ある程度のところで止まるんですか。

小出 それを期待してはいるんですけど、今の犯罪そのものをみていて、半分まではいかないけども、大半は自転車窃盗みたいな犯罪ですよ。それ以外のなかで、いろいろな犯罪が増えてきている議論の問題ですからね。だから、まだ器の半分以上は、犯罪とはいえないと思ってるんですけど。そういう軽い犯罪と、重い犯罪ありますけど、重い犯罪が現在では日常化してきてしまっていると、犯罪を黙認してきてしまうということになってしまうわけで、自転車泥棒と同じような形になってきてしまうんですよ。人が殴られるのが日常茶飯事になってきてしまう。そうすると、非常にヤバイ状況になってきてしまう。だから、ほんとに抑えられるかどうかの状況になってくると思うんですよ。あと、ボーダレス化というか外国人流入に対して日本の入管法でいつまでもつのかという問題があるようですね。経済がどうなるか分からないけど、やっぱり日本がこのままでいったら、かなり空洞化していくので、いまでも相当してるけど、やっぱりそれを止めていくのが、やっぱり安い労働人口だし、労働力を持ってきて日本で生産するというのを選択する人も、当然出てくるわけですね。それが一つの大きなムーブメントになった時、入管法がもつかなと。

伊藤 積極的なその移民生活をとったときに・・・。

小出 だから、一時期ブラジルの二世の移民まで緩和したけれども、やっぱりドイツとかイギリスなどが、移民で社会不安が大きくなった、という事例を知っているもので、その上で経済問題も絡んでいるものだから。国際的な圧力っていうのも、ボーダレスがもっと進めば、別の意味で出てくるかもしれないですね。そもそも人間の行き来を止めることはできるかという、そういうボーダレスを突き詰めていくとそうなるのじゃないかな。

伊藤 この研究会の先生である、奥田先生は中央大学の外国人の社会学のご専門ですよ。新大久保とか高田馬場とかの、いろいろな外国人の方を調査をされているようですけど、大半の外国人は真面目にやっています。逆に外国人によるプロ的な犯罪が起こると、ほんとに暮らしにくいようですね。結局、暮らしにくいし、就職もしにくいという状況で、子供が学校に行かないとか、行っても学校に行かなくなるとかで、教育が受けられないそうなんです。そうすると、国に戻っても、教育を受ける事ができないし、仕事につくこともできない。

小出 オープンにされないとか、パブリックにされないから、むしろ、ママ子扱いにされてしまう。保険の問題とかもそうです。変なことをいうと、不法就労になってしまうわけですね。そういう人達は、犯罪をしようとしているのではなくて、真面目にやろうとしているだけだから、学校に行こうとしても、オフィスに行こうとしても、行けないというわけですね。そういう問題が出てくるわけですね。正当に認められていない。いま、鳩山議員がそういう人達にも選挙権を与えようとか。正当な権利を持つ人として扱わない限り、非常にボーダレスになってしまう訳ね、犯罪者と正常者が。異常な状況を圧力によって抑えこんでるわけですね。それがいつ外れるかどうか。おかげで今のところ数的には抑えられている。

伊藤 このまま行くと、その子供達が、ストリートチルドレンがストリートギャング化して、プロの犯罪集団にスカウトされて入っていってしまう。そうすると、もっと危険になってしまうのではないのでしょうか。参政権もそうなんですけど、帰化させるなら帰化させる。

小出 そういう道を完全に閉ざしてしまうのはね。市民の方のアクセプタンスとしてもそういう目で見ない。要するに彼らは税金泥棒と、そういう意識しかないわけですよ。だから彼らも税金を払ってもらって、サービスを受け、公共サービスを受けるようにしていかなないと異常ではないかと。

伊藤 あと、最近の犯罪の質的な変化ということで、かなり凶悪化していますよね。それに対する報道の異常さというか、伝える必要のない手口とか生い立ちとか、犯人だけでなく、被害者の生い立ちまでをワ

イドショー化していますよね。人の心もすさんでいく気がするんですけど。

小出 マスコミの影響とかもあると思うんですけど、池田小学校なんかもそうだと思うんですけども。一種の危機対応に対する対応が非常に悪い。というか、知らないわけですよ、それは、家庭も含めてそうなんですけど。寄って集って餌にされてしまうわけですね。神戸の震災のときに危機対応マニュアルを作ったときにもそうなんですけど、マスコミ対応の仕方っていうのも、ひとつの大きな問題になったのですよ。学校なんかとってみれば、マスコミの取材は一種の暴力でもあるし、社会的に悪影響を与える。なんというか報道という名を借りたエンターテイメントですよ。その差が彼らの中にもないんだよね。そういうあたりで、新聞記者と議論しあったんだけど、報道規制というものは、彼らにとってほんとにまずい。

伊藤 今、個人情報保護法には大反対していますよね、すべてのマスコミが。

小出 規制というわけではないんだけど、学校側にマスコミ対応という概念がなかったので「マスコミは、正義の味方だ。朝日新聞です」ってくればまじめに答えちゃう、誰も拒否できない、質問されればなんでも答えてしまうわけですよ。拒否できないわけですよ。そうして、夜だろうが、朝方だろうが迷惑を考えない。彼らは、拒否するということを考へもしない。それが、組織や学校なんかになってくると、被告人になったような形で進められて、そこであったことを口走っていくわけですよ。だから、組織は組織として、きちっとマスコミの対応の仕方を、それはそれとして考へていかなければいけない。だから父兄に対しても、学校側が守らなければいけない。

伊藤 報道の受ける側もそうなんですけど、その報道する、発信者の方も昔は、テレビや新聞でも、殺人事件が起こったりしたら、そんなに手口とか細かいことは報道していなかったし、それを今は、解説するんですね。専門家と称する人を使って。昔は専門家みたいな人もいなかったですね。

小出 それがやっぱり、結果として視聴率が上がればいいわけで。今ちょうど政治が人気でてるでしょ。あれと同じ事じゃないですかね。阪神大震災の時の災害報道ってのはそういう事だったということで、あとで反省みたいのがあったんですよ。彼らにとっての倫理規定っていうか内部規定、自主規制でやるっていうことが彼らの言い分ですけどね。やっぱりなかなか線がひけないんですよ。それは逆にいえば一般市民の良識みたいな所で判断していくしかないような気はするんですけどね。規制することはできないんじゃないかな、法律的にね。ただ、拒否するっていうマナーみたいなことは考へた方がいいんじゃないかなって気はするけどね。

伊藤 ただ拒否すると、やましいことがあるんじゃないかって報道しますよね。そうすると、やっぱりアメリカみたいになんかあったらすぐ、まず弁護士、警察よりも弁護士っていう社会になってしまいますよね。本人は絶対出てこないよ。

小出 要するに代理人とか、あるいはいわゆる報道官みたいな、ああいう風な特殊な人にしゃべらせるしかないわけですよ。マスコミに対しては当事者が出て行くって事はまずない。顔も出さないってことですよ。その時も新聞記者と話していて、どっかの災害があったときに、地元の新聞社ってのは、地元の人の被害に対して、非常に同じ村意識みたいなのがあるわけですよ、そうすると、事件が起こって悲しい最中に顔写真撮って来いっていわれるわけですよ。でもとてもそんな、人が死んで騒いでいる時に、被害者の顔写真なんて載せられないっていうわけですよ。ところが東京から来た地元とは関係ない新聞社は、その日のうちに被害者のところから全部、顔写真とか持ってきて、そして結果的には地元の新聞社だけ顔写真載せなくて、ほかの大新聞は全部顔写真載ってっというような、結果としては営業的にはあんまりだったけど、そういうような話はあるんですね。

伊藤 顔写真もそうなんですけど、被害者の名前もね、出す必要があるのかと思うんですよ。身内の人だけがわかっていればいいじゃないですか。加害者はやはりいろんなケースありますけどもね、加害者が写真とか名前を出されて糾弾されるのはわかるんですけど。被害者が何で新聞に名前や顔出なきゃいけないのかなと思ひまして。

小出 そうですよ。むしろ被害者の情報が多いんですよ。要するに、加害者の方は警察がすべてコントロールしちゃうから、情報出ないことがあるから、被害者の方へいってしまうんだよね。問題ですよ。

伊藤 ですから、何日に何県で、こういう殺人がありましたと、犯人はこれでしたと。私はそれでいいと思うんですよ。それが、こういう風にナイフで何回も刺したとかね、どう計画したとか、原因はこうだったとかね。

小出 それはねえ、日本の新聞だけじゃないですかねえ。ああいう犯罪報道とかが詳しく出てるのは。ほかの新聞なんかはもっとローカルな新聞ですよ、アメリカなんかは。

伊藤 そうですね。タブロイド紙のようなものには面白おかしく書きますけど。

小出 うん、でも普通の新聞にはあんな記事ってのは、そうとう大きな事件しか載らないよね。

伊藤 FBIが扱う、何州にもまたいでやっている連続殺人とかね、そういうのは載りますけど。

小出 それ以外は載らないよねえ。

伊藤 地方で殺されたとかいうのはほんとに扱いが小さいですよ。死亡通知みたいな記事しか載らないですよ。

小出 だからあれも日本の新聞の型なんじゃないかなと思いますよね。

伊藤 殺されたり、犯罪に巻き込まれたりした瞬間にね、公人になってしまうというか。

小出 それから、三面記事っていう欄そのものが異常なような気がするんですよ。社会面ですよ。外国の新聞では社会面なんて無いんだけどなあ。

伊藤 そうですね。

小出 無いですよ。日本の新聞なんてテレビ番組とスポーツ番組と社会面と、この三つが無くなると売れなくなるじゃないかな。

伊藤 おっしゃるとおりですよ。

小出 でも、本来はもう少しコラムみたいなもの、社説とか論調みたいなもの、あと政治経済。要するに、圧倒的に外国の政治に関する記事がまったく少ないよね。外国の新聞社に比べてね。特に日本なんか、アジアの一員なんだから、アメリカの記事は載ってるけどタイでどうなってるとか、フィリピンがどうなってるかなんて記事はほとんど無いですね。隣の韓国がどうなってるかもぜんぜんわからないし。

伊藤 あれは英字新聞読まないとぜんぜんわからないですよ、日本の新聞じゃ何読んでもわからないですね。中東情勢とかぜんぜんわからないですよ。

小出 ひどい話ですよ。非常にドメスティックな新聞ですよ。ほんとに社会部の記者なんて要らないんじゃないかな？なんて(笑)。社会部の記者なんて何の役に立つんだろうって思いますよね、そういう意味じゃ。

吉川 人数は多いんじゃないですか？社会部の記者って。

小出 要するに外国のことは全部ライターとか外国通信社が入って、記事をそのまま載せるだけだから、オリジナルは社会部しかないわけですね。

吉川 都庁に記者クラブというのがあってですね、そこにはいろんな新聞社が入ってますが、その記者はほとんど社会部の記者だそうですね。

伊藤 石原都知事の記者会見がテレビでやっていますよね。私はあれが好きで、金曜にダイジェスト見てるんですけど。あの記者は社会部なんですか？

小出 一般の人が普通の社会報道としてとってるわけね。政治としてとってるんじゃない。そのへんの感覚はあれだなあ。

伊藤 いろいろな先生方にお話聞いていても、いつも最後になんか暗澹としてきちゃうんですね(笑)。ほんとに皆さんやっぱり日本はいろんな意味でどうしようもないねというような感じになってしまうんですけど。今までにもいろんなヒント頂きましたけど、今後どうしていったら、特に都市計画みたいな話で言ったりすると。

小出 都市計画そのものも、ながら的にね、経済活動の中で、大規模開発とか、新規プロジェクトとかそういう、一種の夢みたいなのが摘まれちゃったわけですよ。結局後は負の遺産みたいな事、それを修復していくというか、再生みたいな話が多いわけで。犯罪っていう面をみると、逆にいえばその中で、社会、都市計画そのものの中の戦後の経済の効率化とか、あるいは、それプラス快適性のようなことが一番大きな主眼として、都市の開発がされてきたのは確かなわけで。それが今言ったような外圧で止まっちゃったわけで、逆に言えば都市の大きな支えるコンセプトの中で、一番アンダーグラウンドの部分がちょっと出てきてる気がするんですよ。それが安全であるとか安心であるとか、あるいはもうちょっときちっとした、インフラの整備であるとかね。もともと都市が持っていた、考えなきゃいけない要素の中の、昔からのものが、経済の中でかくれちゃって、地下に埋まってたものが、逆に出て来たって感じはするんですよ。だからそういう意味ではきちっと都市の成り立ちってゆうか、何のためにあるのかって事を考え直すひとつ

の機会ではあるかもしれないですけどね。車社会と経済発展の中で国内的なネットワークを作っていったというひとつのスタイルが、完全に自明のものであったのが、少し見直されるっていう事になってくる機会かもしれませんね。昔は町を作るのは地中海なんかじゃ、病気の問題もあるけど海賊から守るために、山の上に作るとかね、あるいは日本の都市なんかでも、道路の形態そのものを戦争を考えて作ってとか、いろいろ考えていたわけですね。都市の安全の仕組みなんかを、都市全体として考えることはなくて、個人の、エンドユーザーの責任にすべて還元されていて。あるいは特殊な警察っていうところで分業化されてったものを、もうちょっと総合的に見てみるっていうひとつの機会になってきているんじゃないかなって気はしますけどね。

吉川 さっき石原知事の話が出てきたんで、あの人が出てきてから例えば防災訓練とかいって自衛隊と一緒にやるのが非常に増えましたよね。

小出 増えました。

吉川 そうするとね、市民の感覚としては、一方では石原さんのリーダーシップに期待するっていう面もありながら、他方では、一種のおぼろげながらも民主主義はどうなるって気持ちが常にあるわけで、そういうあたりはどこでバランス取るのか、危機管理だから民主主義はいったん停止よって話はわりかし通りやすい話だし、なんか事件でも起こればそれはみんなそうだと思うわけですね。その辺はどこでバランス取るのかっていう……。

小出 なかなか難しいですよ。自衛隊をどう扱うかっていう問題があって、今までは要するに、阪神淡路の震災にしても何にしても、自衛隊に対しては完全にシャットアウトしてた状況で、それに対する議論もぜんぜんせずに、だめだってことで動いていたもんだから、なかなかコミュニケーションできなかったり。それに対してのアンチテーゼみたいな受け取り方をすれば、石原さん自体がタカ派だとかいう事を別にすると、結果的にはそれを容認していくっていう感じはありますよね。当然自衛隊そのものも災害派遣とかあるわけで、多分それを今まで入れなかったんでしょう……。ただ、個人的にはやっぱりね、石原さんそのものが、相当やっぱり権力思考って言うか、そういう所がありますんで。だからその辺はなかなか言うのが難しいところがありますよね。警察の事に関して、警察力を強くするとか。具体的には、警察の行う事業とかにお金を出してくれるとかね。そういうことが現実起こっているわけですよ。そういう意味では非常にミクロに見るとプラスになってるんだけど、マクロに見た場合に、警察集中国家になっていたり、あるいは軍事偏重主義になってくとかね、そういう恐れは無きにしもあらず、であるんだけど。まあ都政っていう中でみれば、今のところウェルカムっていう感じが強いんじゃないかなって気はしますけどね。だからちょっと難しいですね。でも、今自衛隊を引っ張り出してきたって言うのは、ある意味ではプラスなのかもしれないですけどね。

伊藤 歌舞伎町の防犯カメラは都知事がやろうとしたんですかね？

小出 あれは都知事ですねえ。

吉川 そうですねえ。そういう話が好きではあるねえ。あと社会事業大学の跡を留置所にするとかね。

小出 そういう意味で、今まで自民党と社会党の二台勢力の中でタブーとされてきたものを引っ張り出す、そういう面でのことはあるかもしれないですね。無意味にタブーにしてきたわけですよ、逆にいえばね。だからそういう意味はあるのかもしれないね。ただ、引っ張っていくときの社会的な全体として、自衛隊法をきちんと整備して、災害派遣をもうちょっと定義するとかね、そういう手続きをやってくれたら、もっと明確になるんですけどね。そうすると我々もすっきりするんだけど。このままでは現行法そのままですってしてしまうとか……。治安維持なのか災害派遣なのかっていうことの差がね、わけわからないんですよ。今のところ日本の状況が、災害と治安がそんなに混乱するって事はあんまり考えられないわけだからいいんだけど。そのときの状況によってはその差が無くなるわけですよ。ほかの国なんか、地震が起こったときに革命が起こるとか暴動が起こるかは、もうひつついちゃってるわけですよ。そういう中で自衛隊の出動というのは、治安出動になるか、災害派遣になるのかわからないわけですよ。現場でね、どっちをやっているかなんてわけわからないわけですよ。そうするともう歯止め効かないわけですよ。今のところはね、そんな鉄砲もって、火災現場とか地震の現場に行くとは考えられないわけで。

伊藤 今先生おっしゃった自民党と社会党がずっとタブー視してきたものっていうのが治安防犯とか災害とかに関わらず、教育もそうだし金融もそうだし、全部そうですね。そう言われてみれば。

小出 だから、そういう意味での、それが崩れちゃったとこで今問題になってるんだけど。教育もずいぶ

ん変わってきてるんですよね。良くなるかはわからないけど。教育も教育基本法変えるわけでしょ、だからそういう意味で、戦後の何年体制って言うのか知らないけど、その体制が崩れて新たに巻き返したいなことが今起こっているのは確かですね。

伊藤 先生もこれからやっぱり御専門の分野で大変ですよ。

小出 私はなんか警察ってゆうより都市計画の方が強いもんでね、意識としては強いもんだから。結果的に今の市民参加の街づくりで、犯罪ってゆうか不安の方が強いですかね、町の不安であるとか、あるいは汚い部分っていうようなところは、非常に共通した認識ってのができるわけですよ。基本的に街づくりをしようってしたときに、特殊な、例えば老人介護だとか特殊な目的を持ってない限りは、大体自分の街を歩いてみて、一番目に付くところが汚いところであるとかですね、嫌な所とか暗い所とか不安な所とかね、そういう所をどうするかっていうのが街づくりの一番原点になっていて、その裏には犯罪が絡んでるわけですよ。まあ、そういう意味では非常に大きな共通のモチベーションであるし、非常に入りやすいモチベーションであるっていうことがあって、それを解決する最初の取っ掛かりとしては犯罪ってのはやりやすくして。それが防犯環境設計みたいなことを考えると、街の環境を良くすることが、犯罪に対してもプラスになるっていう事であればね、非常にお互いにとって良いんじゃないかなって。逆にいえば、防犯って観点からすると環境の改善によって犯罪を防げるかってゆうのは、絶対的には言えないわけですよ。それから犯罪を減らすってこともできないわけですよ。だから、そういう意味で防犯って面からすると、パーフェクトじゃないわけですよ。そうすると警察の方の立場からすると、私がやっていることは非常に不完全なことだという風に思ってるんですけど、私はそれでいいって思うんですよ。自分は警察の一員じゃないから、まあ犯罪減らすってのは別の手立てでやった方が良くって。防犯グッズみたいなことで家をね、完璧にするっていうのは、犯罪に対して非常に強くなりますけど、むしろそれよりも街全体をもうちょっときちっとしたコミュニティを形成してっていう事で防犯に対して貢献していくって風にやっていきたいと思ってるんですよ。じゃないと犯罪を防ぐって目的だけでいくと、要するにドアを開めたり、防犯グッズをつけたり、セキュリティの会社と契約したりってことで終わってしまうわけですよ。そう考えているからその辺のスタンスがちょっと違うかなと思っっていますね。

伊藤 私もずっとそういう立場で研究を続けてきましたので、この間もそういう話をシンポジウムでしました。そうじゃない方も装置系の方とかいろんな方いましたので、全部これで防げるとは思っていないけども、という話し方で・・・。

小出 だから、犯罪を防ぐっていう観点からすると、きわめて弱いし、いいかげんだし。そうなんだけど、その波及効果ってゆうことのほうに主眼があるから、だからこういうのをひとつのモチベーションとか手段として使っていったらどうかと思うんですね。

伊藤 さっき先生おっしゃったように、犯罪の減少というより、犯罪の不安感というか、そっちが解消されればですね、あってしまったら、あってしまった時でまた違う対応があるんですけど。普段からそういうのにおどおどしながら生活しなきゃいけないってこと自体が私は異常だと思うんですよ。それは報道も含めてなんですけども。まずそちらの方を街づくりでね、やっぱここにいれればごくそういう事の心配をしなくて安心して子供遊ばせられるとか、そういう事が大事だと思うんですよ。

小出 犯罪被害の率なんか交通事故に比べたら少ないですよ、まだね。だからそういう意味からすれば被害実体ってのは無いわけで、結局は何かってゆうと不安感なんですよ。不安感ってのは自分の実体験に基づかないから、こういう報道とかね、犯罪が起こると犯罪に対して不安に思っていますとか地震が起こると地震に対して不安に思っていますとか、アンケートやるたびに変わっているわけですよ。そういう意味では非常に不安定ですし、自分の周りしかわからないんですよ。要するに地域を平等に見ることができない。そういうような事もあって、非常に意識としてはあいまいであるし、ほかのものに非常に依存する意識があるんですけど、それでもなんとなく自分の住んでる所に対して不安に思っていたり嫌な思い持ってる所とかいくつかあるわけで、やっぱりそれを解決しない限り街は良くなれないって思ってるんですね。街づくりってそういうものなんじゃないかなって思ってるんですね。

伊藤 この前、清永先生からメール頂いて、先生ももらいましたでしょ。両隣に空き巣が入りましたっていうの(笑)。二週間ほど前だったんですけど、突然朝メールが来てですね、ご報告というメールでですね両隣に空き巣が入ったということだったんですけど、それが違う日に入っただけで、連続じゃなくってね。違う日に入っただけは、狙って入ってるんだろうって、そこらへん周辺をずっと来てるんですっ

て、ところが私の家は飛ばしたと、だから、専門家としてね、これで私の家に入られたら世間に顔向けできなかつた。私の家を飛ばしてくれて良かったと(笑)。近所にヒアリングして、今回はこのテーマで研究しようって(笑)。あのあたりはすごく込み入った所ですからね。

小出 でも侵入盗りなんかは、リストラ産業って昔から言ってるんだけど、儲からないと思うんだけどね。本当に産業として泥棒が成り立つためには、相当組織的にやらないと成り立たないんじゃないかなと思うんだよね。だから結局社会からドロップアウトして、一種の最低限の生活みたいなのでやっている人ぐらいしかいないんじゃないかな。それか、本当のプロだよ。組織的にやっているような。

伊藤 その日食べればいいやって思ってやっているぐらいの人と、逆の方は、組織化というか、日本のやくざと外国人と組んで、狙いつけてやらせるっていう分業化されていますよね。

小出 日銭を稼ぐためにやるって人は、なんか浮浪者と同じような生活ですよ。

伊藤 このアンケートの質問にも入れたんですけどね、山形の豪農の家で強盗をやったと思ったら、今度は新潟行ってやってこっち行って、あれ全部連続なんですよ。だけどぜんぜん場所が違う、それこそ200キロぐらい離れたところで、もうあそこは戸締りしてないけど、その、江戸時代から受け継いでいる何百万もする壺とか持っているぞって、ちゃんとやくざが調べて、それでももう平気で殺しちゃうわけですよ。血も涙も無く殺しちゃって、というのは、もうほんとにすごいプロ化というか。

小出 だって、今家の中に現金ってほとんど無いでしょ。だから、ある程度青少年の犯罪と同じで百円、二百円の世界ですよ。まあ今ちょっと銀行があれば、家においてあるとかあるかもしれないけど、普通は無いですよ。あとせいぜい貴金属かカードでしょ。貴金属なんかある所はほとんど無いから、後はカードしか無いんだけどね。カードなんか素人じゃ引き出せないし。全部香港持ってかなきゃ行けないわけで、それか、タイとか中国のマフィアとかにしかできないわけで。

伊藤 では先生今日は本当にありがとうございました。